



フィリピンの高原都市バギオ 日本人街の 面影

異国の大地にたくましく生きた同胞たち。
かつて美しい山々に囲まれたバギオに
戦火とともに消えた日本人街があった。



【文・写真】 澤田公伸 古写真：古屋英之助氏提供

(左上から時計回りに) [1] 日本人経営のパインズ・ホスピタル [2] 日本人経営の製材所 [3] 日本人小学校には現地人を母に持つ生徒も少なくなかった [4] 日本の秋の祝日に合わせて行なわれた大運動会 [5] 米国独立記念日のパレードにはバギオ日本人会も毎年、山車を制作して参加した [6] 現地の山岳民族衣装での記念撮影





左から[1]バギオ大聖堂は戦争中の米軍による爆撃から免れたため、戦前と同じ姿を今も残す [2]セッション・ロードに立ち並ぶ商業ビルの合間に、当時の米軍による激しい爆撃で焼け落ちたホテルの壁の一部がそのまま残っている [3]戦前、現地最大の雑貨店だった「Japanese Bazaar」があった場所には、現在、ピンク色の商業ビルが建っている [4]バーンハム公園では今もボート遊びが人気だ [5]日本人小学校跡は、現在、レストランになっており、当時の校門がそのまま使われている



右上：バーンハム公園でボート遊びを楽しむ
右下：日本人幼稚園の卒園写真。米、日、フィリピンの旗が掲げられている



セッション・ロードにあったジャパニーズ・バザー

マニラから車でルソン島中部の田園地帯を6時間ほど北上すると、ケノン・ロードと呼ばれる九十九折の山道に入る。この道を1時間ほどかけて登り切ると、近くの山々の頂に街が広がった。フィリピンの「夏的首都」と称されるバギオだ。

19世紀末にスペインからフィリピンの領有権を得た米国が直面した問題の一つが熱帯気候だった。3月から5月にかけての夏の時期に最高気温が40度近くまで跳ね上がる。米国は政府高官や公務員たちの夏の避暑地として、ベンゲット山脈地帯に道路を切り開き、高原都市の建設を目指した。

標高1500メートルほどにあるバギオは、周りの山々に緑の松林が広がる。早朝には白い霧がたち、人々が長袖のジャケットや毛糸の帽子をかぶるほど涼しい。南国というより、秋の信州にでもいるような雰囲気だ。

バギオには、大統領や政府高官が夏の間、公務を行う大統領官邸ザ・マンションを始め、瀟洒な別荘風の建物が多い避暑地である。国内外の観光客も多く訪れ、夏の官邸と高原植物を鑑賞できるボタニカル・ガーデン、山岳民族の民芸品店が並び、美しい山並みが



一望できるマインズ・ビューなどの観光所も多い。

メインストリートは、500メートルほどのゆるやかな坂道、セセッション・ロード。おしゃれなレストランやホテルなどが立ち並び、垢抜けた雰囲気での通りである。毎年2月にこの通りでバギオ・フラワー・フェスティバルが開かれる。山岳先住民の伝統ダンスや、山車が繰り出すパレードがある平和で国際色豊かな祭りだ。

このセセッション・ロードにかつて日本人街があった。バギオが建設された20世紀初頭から戦前にかけて移り住んだ日本人移民たちが、道沿いに写真館や大型雑貨店、ホテルや病院、食堂や会社事務所などを次々と開き、豊かな暮らしをしていた。私は、その日本人街を尋ねてバギオに来た。

労働者として渡った日本人

日本人街の歴史は、ケノン・ロードの建設が始まった1900年に遡る。難工事に頭を痛めた当時の米国人道路建設責任者であるケノン少佐が、多くの日本人や中国人など13カ国から出稼ぎ労働者を集め、道路工事に従事させた。日本人労働者の数は、延べ約2400人にも達した。工事は難航し、道路が完成する1905年までに、日本人労働者の700人近くが事故や病気などで命を落としたともいわれている。

ケノン・ロードの完成後、ミンダナオ島ダバオの麻農園に仕事を求める者もいたが、そのままバギオに残る者も多かった。バギオの都市建設に必要な大工や棟梁、金銀鉱山の労働者、またバギオ近郊での野菜農園の開拓のため日本人労働者の需要が高かったのだ。

そして、日本の福島、山梨、福岡などから、多くの日本人移民たちが押し寄せた。後にバギオに市制が敷かれると、公設市場や市庁舎を中心に開発が進んだ。そして、この市場の近くにあったセセッション・ロードに日本人の商店が立ち並ぶようになり、街は活気を帯

びていった。

憧れのバギオ暮らし

戦前、バギオに生まれ育った写真家の古屋英之助さん(76)に現地を案内してもらった。古屋さんは終戦後に日本に帰国したが、1989年以降、毎年のように生まれ故郷のバギオに里帰りしている。

古屋さんの父親の正之助さんは、山梨県出身。当時バギオ最大の百貨店だった「ジャパニーズ・バザー」(1912年創業)に併設されていた写真館「バイン・スタジオ」の主任を務めていた。百貨店のオーナーで同郷の早川豊平氏に誘われ、留学先のマニラからバギオに移った父親は、写真技師の腕前が評判となり、フィリピンの初代大統領、アギナルド将軍とも親交が深かった。古屋さんがバギオで生まれた時、将軍が直々に病室を訪れ、母親の英子さんの傍らにいた赤ん坊の古屋さんに「ロドルフォ(ルディ)・フランシス」と名付けてくれたという。

ジャパニーズ・バザーはセセッション・ロードの中ほどにあったが、当時、この通りには日本人が経営する商店や建



ジャパニーズ・バザーの2階で開かれた誕生日パーティー



かつてのセッション・ロード坂下。タクシー乗り場が見える



古屋英之助さんと山梨県出身のご両親。バーンハム公園にて

フィリピンの高原都市バギオ 日本人街の 面影

右から[1]展望台から見たケノン・ロードの一部。バギオ市へ通じる主要道路は現在、ケノン、マルコス、ナギリアン
の3本ある。マニラ首都圏からの長距離バスは普通、マル
コス・ロードを一気に駆け上る [2]かつて日本人学校が
あった敷地には、本願寺が経営する幼稚園と寄宿舎もあ
った。寄宿舎の一部は戦後、ホテルになっている。そのホ
テルオーナー（写真左）と一緒に記念撮影する古屋さん（中
央） [3]セッション・ロードの歩道を行きかう人々。最近
車の数が増えて、バギオでも交通渋滞がひどくなりつつ
ある [4]ケノン・ロードの建設工事で亡くなった日本人の
慰霊碑。かつて慰霊碑の周囲には日本人墓地が広がって
いたが、今はその面影はほとんどない。この慰霊碑の土台
は戦後、山下財宝を探していた地元住民によって大規模に掘
り返されたことがあったという



設会社の事務所などが立ち並び、日本
人経営の病院「パインズ・ホスピタ
ル」や「フジ・ホテル」「エンパイヤ・
ホテル」もあって、バギオでの日本
人の存在感は圧倒的だったという。当
時、珍しかった車も乗り回すことが
でき、日本では戦後によく公開され
たテクニカラーの長編映画『風と共に
去りぬ』もセッション・ロードのパイ
ンス・シアターで観ることができた。
当時の写真から、その豊かな暮らし
を垣間見ることができよう。古屋
さんは「この街の日本人たちは、日本
に写真を送って、自分たちが異国でい
かに幸せに暮らしているかを故郷の親
族たちに見せたかったのでしょう」と
当時を振り返る。

戦火に消えた街

しかし、この幸福な生活も太平洋
戦争で一変した。1941年12月8
日、日本軍は真珠湾を爆撃した同じ日
にバギオのジョーン・ヘイ米軍基地を空
爆。その後、日本軍はルソン島に侵攻
し、翌年1月2日にマニラに無血入城
する。そして、約3年半にわたりフィ
リピンは日本軍に占領された。

戻る者もいた。彼らは人々の反日感情
を避けるように街を離れ、山里に隠れ
て暮らした。日本人の血を引くことを
隠して日本語も使わないようにしたと
いう。

こうした日系人の支援が始まったの
は1972年のことだ。日本で教師を
していたシスター海野が、コルディリ
エラの山々に隠れ住む日系人の存在を
知り、山野を駆け回って探し出し、「北
ルソン比日友好協会」を設立したのが
契機となった。現在、同会の理事で名
誉日本総領事も務めるカルロス寺岡氏
は引き揚げ後、自らバギオに戻った一
人だ。同会は今、2世から5世まで
1408人の日系人会員がいる。

古屋さんは運良く一家全員無事で終
戦を迎え、捕虜収容所から日本に強制
送還された。そして、古屋さんは日本
で学校を卒業後、商業写真家として活
躍したが、いつもバギオのことが忘れ
られなかったという。

1989年11月、北ルソン比日友好
協会や日本人支援者を中心となってケ
ノン・ロードの記念展望台が完成した。
その完成式に合わせて、バギオ日本人小
学校の同窓生たちが現地で開催を開
いた折りに、古屋さんは実に戦後44年

戦争末期、フィリピンの防衛を任ざ
れた第14方面軍司令官の山下奉文大将
がバギオを防衛拠点としたため、バギ
オは米軍の一斉攻撃を受けて壊滅的な
被害を受けた。古屋さん一家が避難し
たセッション・ロード脇の崖にあった
防空壕から、近くの高級ホテルが激し
く燃え上がるのが見えたそうだ。

崖の上にあったバギオ大聖堂は爆撃
を逃れたものの、教会前に集まってい
たフィリピン人避難民たちの近くに砲
弾が落ち、多数の死傷者が出た。
古屋さんらに在留邦人は、撤退する日
本軍に従い、北側のコルディリエラ
の山岳地帯へ避難した。当時、軍とも
に逃げた邦人は3000人ほどいたと
いわれる。しかし、その山奥で在留邦
人たちを待っていたのは、日米軍の激
しい交戦による「鉄の暴風雨」と、飢
餓による生き地獄だった。

日本人街の面影を追って

戦後、日本軍に協力した者たちは厳
しく処罰され、多くの日本人が強制送
還された。日本人と結婚した比人女性
とその子供たちのなかにはバギオに残
る者や、日本に引き揚げ後、バギオに

ぶりの里帰りを果たした。この時、寺
岡氏の妹で同窓生でもあったマリエ
さんから「おかえりなさい」と抱擁の出
迎えを受け、自分の故郷に帰ったこと
を確信したという。

古屋さんが、日本人小学校跡を案
内してくれた。かつて日本人小学校
があったマグサイサイ・ストリート沿
いの敷地はレストランになっていたが、
校門はそのまま残っていた。当時、こ
の小学校の隣にあった本願寺経営の寄
宿舎も建物が現存しており、安ホテル
の一部として使われている。ホテルの
オーナーは戦争中、日本軍が米比軍捕
虜を長距離歩かせた「バターン死の行
進」の被害者だったが、我々を快く受
け入れてくれた。

かつて鬱蒼とした森に囲まれたバ
ギオは今、住宅地が広がり、道路
に車があふれ、当時の街の様子を偲
ばせるものはわずかしかない。古
屋さんは、同窓生たちの間でよく話
されるバギオの思い出は、いつも
早朝に近くの店に買いに走ったパ
ン・デ・サル（丸い塩パン）の暖か
くて懐かしい味だと語った。バギオ
の日本人たちが作り上げた平和な歴
史の断片を集めるかのように。 ■